

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

(七言絶句)

語註・典故・作詩メモ						結句	転句	承句	起句	詩題
・巴港…函館の雅称 ・臥牛山…函館山の異称 ・酸風…肌寒い風、身にしみる風 ・清寒…さえずえとした月の光 ・灼灼…花が盛んに咲くさま						満	仰	吹	来	訪巴港月下観櫻
						枝	首	頬	追	
						灼	清	酸	春	
						灼	寒	風	色	
						似	在	落	臥	
						開	花	日	牛	
						顔	裏	閑	山	刪韻
その他のメモ						読み下し文				
今年の桜は例年になく早く開花・満開となった。 四月末に東北の桜見物を考えていたが、急遽キャンセル。 目的地为北海道（函館・登別・小樽・札幌）に変更した。 日中は暖かい日差したが、朝晩の冷え込みは北海道ならでは。函館山では強風も吹いて一層冷え込んでいた。 そのような状況で夜桜見物客は疎らだったが、月光を浴びる桜花は喜んでいるように見えた。						満枝 灼々として 開顔するが似し	仰首すれば 清寒 花裏に在り	頬を吹く酸風 落日閑なり	春色を来たり追う 臥牛山	巴港を訪ね月下に観櫻す

作詩日	平仄式	平起式	名前
令和五年五月八日			牛山 知彦

No. 2

東京 上野公園 での宴会風景	東皇 ー 春の神	融々 ー 和らぎ楽しむさま	◎ 語注・典故など	白文												東韻平起		
				結句	批正	転句	批正	承句	批正	起句	批正	詩題	批正					
				東皇	○		月下	●		雅客	●		晩春	●			月下	
				齋	○		花	●		瓊	●		都	○			観	
				到	○		方	○		府	●		櫻					
				樂	●		爛	○		景	●							
				無	○		漫	○		融	○							
				窮	○			●		融	○							
書き下し																		
			◎ 作詩メモ・釈文など	東皇			月下の			雅客の			晩春の			月下		
				齋し			桜花			瓊筵			都府			観		
				到る			方に			醒			景			桜		
				楽			爛漫			酔の中			融々					
				窮無し														

二〇二三年五月六日

--	--	--	--	--	--	--

結 句		轉 句		承 句		起 句		詩 題	
十 ●		今 ○		雨 ●		携 ○		月下觀櫻	五月課題詩
里 ●		宵 ○		餘 ○		酒 ●			
堤 ○		縱 ●		江 ○		探 ○			
櫻 ○		飲 ●		畔 ●		春 ○			
花 ○		須 ○		月 ●		信 ●			
綻 ●		忘 ○		相 ○		步 ●			
時 ◎		老 ●		隨 ◎		之 ◎		支 韻	

(七言絕句)

その他のメモ							

月下に桜を観る つきか さくら み	酒を携え さけ たずさ	雨余の江畔 あめよ こうはん	十里 じゅうり
春を探りて はる さぐ	月 つき	縦飲して しょういん	堤桜 ていおう
歩に信せて之く ほ まか	相隨う あいしたが	須らく老いを忘るべし すべか お わす	花 はな
			綻ぶ時 ほころ ととき

平仄式		岡嶋 宣昭
名前		
作詩日	令五・五提出	

月下觀櫻

真韻

神奈川 漢詩連盟九詩期会【詩箋】

(七言絕句)

その他のメモ

文 し 下 み 説

月下觀櫻

げつか
じてい
こう
じん
せま

月下の寺庭にて香人に逼る

か
れ
い

お
う
じ
ゆ

き
い
う
ん

し
た

華麗なる櫻樹　彩雲に親しむ

かき
ざいせい
ながみ

花期も在世も 長く満たざるに

かぜあたた　　こうゆうまき　　はる　　およ

風暖かく
行遊当に春に及ぶべし

平仄式

灰起式

名前

高橋 幸雄

作詩日

令和五年 五月

語註・典故・作詩メモ

○深院・・・奥深くにある中庭
○簷宇・・・のき、ひさし

その他のメモ

結句	転句	承句	起句	詩題
獨	深	花	月	月下観桜
依	院	片	輪	
簷	寂	梢	皎	
宇	寥	頭	皎	
賦	誰	舞	泛	先韻
幽	共	漫	閑	
篇	賞	然	天	

読 み 下 し 文

ひとり簷宇に依り、
幽篇を賦す

深院寂寥誰と共に賞せん

花片梢頭漫然として舞う

月輪皎々閑天に泛ぶ

月下観桜

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

(七言絶句)

作詩日	平仄式	平起式	名前
令和五年四月十八日			平賀康雄

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

(七言絶句)

平仄式	平起式	名前
作詩日	令和五年五月九日	古川 彌

語註・典故・作詩メモ							結句		転句		承句		起句		詩題			
							春	○		仰	●		満	●		夕	●	月下観櫻酒一卮
							風	○		見	●		路	●		陽	○	
							捲	●		遠	●		櫻	○		雨	●	
							起	●		山	○		雲	○		後	●	
							小	●		烟	○		忘	●		照	●	
							青	○		月	●		歩	●		花	○	
							旗	◎		上	●		移	◎		枝	◎	支
その他のメモ							n											
							春風は捲き起こす小青旗			仰ぎ見る遠山に烟月上り			満路の桜雲に歩の移るを忘る			夕陽は雨後に花枝を照らし		月下観櫻酒一卮

語註・典故・作詩メモ										結句		転句		承句		起句		詩題					
										嬌 ○		素 ●		萬 ●		芳 ○		月下看櫻					
										容 ○		月 ●		朶 ●		春 ○							
										臨 ●		脱 ●		櫻 ○		行 ○							
										水 ●		雲 ○		花 ○		樂 ●							
										更 ●		斜 ○		已 ●		暮 ●							
										清 ○		射 ●		滿 ●		陰 ○		支韻					
										奇 ◎		處 ●		陂 ◎		時 ◎							
その他のメモ										読み下し文													
										嬌 きよう 容 よう 水 みづ に臨 のぞ みて		素 そ 月 げつ 雲 くも を脱 だつ して		万 まん 朶 だ の桜 おうか 花		已 すでに に陂 つみ に満 み つ		芳 ほう 春 しゅん の行 こう 樂 らく		暮 ぼ 陰 いん の時 とき		月 げつ 下 か 桜 さくら を看 み る	
										更 さら に清 せい 奇 き たり		斜 なな め に 射 さ す處 ところ											

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

(七言絶句)

作詩日	平仄式	平起式	名前
令和5年4月			松本祐輔

語註・典故・作詩メモ							結句			転句			承句			起句			詩題	
							花	○		両	●		酔	●		春	○		月下觀櫻	
							唇	○		岸	●		趣	●		宵	○			
							伴	●		櫻	○		清	○		漫	●			
							月	●		華	○		風	○		歩	●			
							静	●		誇	○		過	●		大	●			
							淵	○		萬	●		小	●		川	○		尤韻	
							流	◎		朶	●		舟	◎		頭	◎			

[illegible]

文	し	下	み	読
月下觀櫻 ゲツカ カン オウ	春宵漫ろに歩む大川の頭 シュンシヨウソノ アユ オオカワ ホトリ	酔趣清風小舟過る スイシュ セイフウ ショウウシ ヨボ	兩岸の桜華萬朶を誇り リョウガン オウカ バンダ ホコ	花唇月を伴う静淵の流れ カシン ツキ トモナ セイエン ナガ

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

(七言絕句)

平仄式	仄起式	名前	三浦昭二
作詩日			

語註・典故・作詩メモ				結句		転句		承句		起句		詩題	
				天○		花○		万●		社●		月下看櫻	
				明○		弁●		朶●		庭○			
				如○		霏○		桜○		老●			
				湧●		霏○		開○		樹●			
				覚●		吹○		春●		月●			
				詩○		雪●		意●		光○		庚韻	
				情◎		似●		盈◎		盛◎			
万朶……多くの枝 霏霏……ハラハラ落ちる													

[illegible]

文	し	下	み	読
月下看櫻 げつか かん おう	社庭の老樹に月光盛んなり しゃてい ろうじゆ げつこう さか	万朶に桜開き 春意に盈 ばんだ さくらひら しようい みつる	花卉霏霏 吹雪に似たり かべん ひ ひ ふぶき になり	天明に湧くが如く詩情を覚える てんめい わ ごと しじやう おほ

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

(七言絕句)

平仄式	平起式	森谷正彦
作詩日	令和五年五月七日	

語註・典故・作詩メモ					
					幾番ー幾たび
					花信風ー開花を知らせる風
					冲融ーだんだんやわらぐ
					和気一団ーあたりを包むやわらかい雰囲気
					季春ー三月ごろ。晩春

その他のメモ					
					承句ー仲春金港漸冲融
					結句ー香雪一團無悦窮
					結句ー和気一團無悦窮
					香雪ー花吹雪
					が良いか
					が良いか
					が良いか

結句		転句		承句		起句		詩題
和	○	今	○	季	●	吹	○	月下観櫻
気	●	宵	○	春	○	到	●	
一	●	月	●	金	○	幾	●	
團	●	彩	●	港	●	番	○	
吾	○	櫻	○	漸	●	華	○	
悦	●	争	○	冲	○	信	○	
窮	◎	發	●	融	◎	風	◎	東韻

読み下し文					
和気一團吾の悦び窮まる					
今宵月彩桜争いて發					
季春の金港漸く冲融す					
吹き到る幾番花信風					
月下観櫻					

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

(七言絶句)

作詩日	平仄式	仄起式	名前
令和五年五月			
初稿			諸星暢義

語註・典故・作詩メモ				
○織々	細長くてするどくがったさま。			
○嫋々	なよなよとしなやかなさま			
○院前	院はかこいに囲まれた中庭。ここでは庭前のつもり。			
○老懶	年老いて物事をするにおっくうであること			
○残年	老人の残り少ない寿命。			

結句	転句	承句	起句	詩題
唯 ○ 懷 ○ 老 ● 懶 ● 送 ● 残 ○ 年 ◎	獨 ● 酌 ● 杯 ○ 中 ○ 浮 ○ 一 ● 片 ●	嫋 ● 嫋 ● 櫻 ○ 花 ○ 發 ● 院 ● 前 ◎	纖 ○ 纖 ○ 春 ● 月 ● 薄 ● 寒 ○ 天 ◎	月下觀櫻 先韻

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

(七言絶句)

その他のメモ				
細い三日月がまだ寒い春の夜空に浮かび、 たおやかな桜が中庭に咲き始めた。 一人飲む杯に花びらを一片浮かべてみたが、 思うのはただ、むなしく過ごす老残の身のことばかり。				

唯懷ふ、老懶に残年を送るを。 ただおも　　ろうらん　　さんねん　　おく	独酌の杯中　一片を浮かべ、 どくしゃく　はいちゆう　　いっぺん　　う	嫋々たる桜花　院前に発く。 じょうじょう　　おうか　　いんぜん　　ひら	纖々たる春月　薄寒の天、 せんせん　　しゅんげつ　　はっかん　　てん	月下觀櫻 げつか　　かんおう
--	---------------------------------------	--	---------------------------------------	-------------------

作詩日	平仄式	平起式	名前
2023年5月10日			山口 幸雄